

六 花

月刊俳句雑誌りつか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

5月号

2008

① 春すぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山：『新古今和歌集』小倉百人一首』

② 春過ぎて夏來つらし白妙の衣干したり天の香具山（定訓）

③ 春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山：『萬葉集』卷一 雜歌二

④ 春過ぎて夏ぞ來ぬらし白妙の衣かはかすあまのかぐ山『古來風躰抄』持統天皇

弟子が出来孫弟子が出来 麦秋忌五月二十六日
麦秋忌（山田文鳥忌）

は 初 鯉 藁 火またたく間に尽きぬ

る 留 萌より生ける 鮑の届きけり

す 杉の木を見上げてゐたる端午かな

ぎ 技芸 天に初夏の日矢差し込める



て 天窓を鳴らせる卵の花腐かな
な 名付親訪問したる端午かな
つ 築山の平戸躑躅に黒き傘
き 木曾川の若鮎を追ふ川鶺かな
に 日輪に覆はれぬたる鯉のぼり
け 稽古場の隅に一片春落葉
ら 裸婦像を紅薔薇の香の包みけり
し 白妙の布引の滝仰ぎけり
し 石楠花に脈打ちぬたる蛇の尻
ろ 六甲山に霧のかかれる端午かな
た 太陽の暈に入りたる揚ひばり
へ 偏屈な子に母の日の近づきぬ

雪華抄

ことり

は 春惜しむ桜さくら藪らしべ敷く道に立ち
る 罌いせい砒さいや遠くはためく鯉こい幟のぼり
す 鈴すず蘭らんをつつく指先いとけなし
ぎ ぎらぎらと眼まなこ確かに鯉こい幟のぼり
て 手つかずのままに夜更の柏餅
な 七色にきらめいてをり武者むしや幟のぼり
つ ついと指伸べて一筋湯の菖蒲しょうぶ
き 金屏きんびょう風ふう畳みし座敷風薫る
に 庭石に白き山吹散り初むる
け 劍玉けんだまに興きょうず山吹満つる庭
ら 裸体ふ拭く菖蒲湯の香を惜しみつつ

し 白々と日の中にあり 夏蓬なつよもぎ
し 著しや菫がの花宵に光を得え初そめたり
ろ 輪ろ舞ん曲ど弾く指先に春惜しみけり
た 箏たんす笛すより取り出す麻のシヨールかな
へ への字口するも男おの子こよ端午なる
の 糊のり落とし赤子を包む浴衣かな
こ こみ上げて来るかに新茶香りけり
ろ 蠟ろう色いろ鞘さや深く光らせ 武むし者や飾かざり
も 木蓮の花びら拾ひ集めをり
ほ 本家より届けられ来し鯉こい幟しほ
す 捨て茶碗包み込みたる夏蓬なつよもぎ

大岩をわし掴みして滝凍つる 平居滯

三度目の雪は墓地まで届くべし

夫の喪が明けて母の喪風花す

寒灯や母の言葉もわれになく

これよりは猫との暮し寒の星

おおいわをわしづかみしてたきいつる

滝の凍った様を「わし掴みして」いると格調高く捉えた。凍結した滝の水柱はまさに鷲の鋭い爪が岩を掴んでいるようである。厳しい冬滝の凜とした空気が迫力を喻えるにもっとも相応しい言葉を導入した。この欄に該当する作品は一句のみならず、五句すべて平均点を超えていなければいけないが、掲句が断とつの高得点を獲得し、副主宰の高い評価・推薦もあって六花集九位ながら夢風撰にした。

雪 郷 集

磯焚火

木内美保子

尾^お鱈^{ひれ}つく話燃やして磯焚火
畦^{あぜ}川^{かわ}を泡立て走る春の水
鯖^{さば}東^{あづま}風^{かぜ}テトラポットに波蹴^{なげ}上^あぐ
重ね着をしてぽつちりと露^{つゆ}の臺^{とう}
荒れ果てし土管^{どかん}置場^{おきば}や犬ふぐり

肌着

笹村政子

預かりし孫泣きにくる春炬燵^{はるこたつ}
風光る赤子の肌着^{はだか}二度洗ひ
芽^め吹^ふきたる樹^{じゆ}間に物干竿^{ものほしざお}わたす
ひとところ波裏返る春の海
手のひらに節分の豆ほのぬくし

螢雪譚

選後に

山田六甲

裸木となりて癒しの期に入る

久永 つう

鴨を得て沼おだやかに昏れにけり

藤原 春子

葉を打ち払って冬の木々は冬眠をするがその事が「癒しの期」であるとした。そこが非凡なことなのである。言いたいことの焦点を絞って詠める強みが、つうさんにはある。

鴨が池に来たのではなく逆の視点から鴨を得た池という捉え方がよい。そのうえ格調高く詠んでいるのが良い。

しんとしてただ降り積る寒さかな 菊谷 潔

てのひらを水のこぼるる蛙の子 廣瀬 佳織

しんとして雪の降り積もって行く寒さを肌で感じ取っている感覚的な作品になった。聴覚や皮膚感覚を俳句に活用できる人。

お玉じゃくしを手で掬ったら水のように、水と共にこぼれるように逃げてしまった。「水とこぼるる」が良い。お玉じゃくしのつるつるとした感触までが伝わってくる。(以下略)

雪 樹 集

初風呂

K O K I A

行く年の名残なごりの雨となりにけり
セロファンのつきしままなる注連飾しめかざり
嬰やに置く熊くまの絵柄えがらの祝いわい筥ぼし
水みづ洩ぼなの干ひからびてゐる稚子ややこかな
初風呂はつふうりよに羽はばたく嬰やの手足てあしかな

鏡餅

松本文一郎

盃底さかの木の葉は浮うき出でづ大旦おおあした
心こころなくも節酒ふしを誓ちかふ初詣はつもうで
神前かみまへにでんと据すれる鏡餅かがみもち
裏木戸うらきどや朝日あさひさしくる福寿草ふくじゅそう
元旦えんげんや二階にがいに届とどく門かどの竹たけ

六花集

六甲選

菊谷 潔

雪の朝鳥鳴きかはす中にあり
入相いりあいの雪かく背なに雪の降る
しんとしてただ降り積る寒さかな
すみわたる遠吠よざむひびく夜寒よざむかな
しづしづと足運びけり雪の朝

久永 つう

藤原 春子

沖をゆく船まで染めて初茜はつあかね
返り見る替へし暦や年納め
唇に第九親しむ年の暮
裸木はだかきとなりて癒しの期ときに入る
除夜の鐘さりげなく聞く喪中かな

鴨を得て沼おだやかに昏れにけり
浮く鴨に湖うみのさざなみやさしかり
鴨の群むれ水底の餌をつひばめる
二羽の鴨群の中へと舞ひ降りぬ
湖暮うみれてさみしさ誘ふ鴨の声